

米高校生用の歴史教科書 「慰安婦記述」訂正を求めろ!

愕然とする記述

「日本軍は『慰安所』と呼ばれる軍用売春宿で働かせるために、最大で二十万人にも及ぶ十四歳から二十歳までの女性を強制的に募集、徴集、制圧した。日本軍は天皇からの贈物として、部隊に女性を提供した」

アメリカの教科書会社、マグロウヒル社が発行した高校生用歴史教科書『伝統と遭遇』の一節だ。

安倍総理も「愕然とした」と述べたこの記述に対して昨年十一月と十二月、外務省は「重大な事実誤認や日本

政府の立場と相いれない記述がある」として在米総領事館を通じ、マグロウヒル社に記述内容の是正を要請した。

だが、マグロウヒル社は「慰安婦」の歴史事実について、学者の意見は一致している。わが社は執筆陣の著述、研究、表現をはつきりと支持する」と修正を拒否。

さらに二月には米歴史学者十九名が日本政府に対する抗議声明を公表すると発表。三月二日、声明全文を掲載した歴史雑誌が刊行された。

これに対し、日本側でも動きがあった。現代史家の秦郁彦氏を中心と

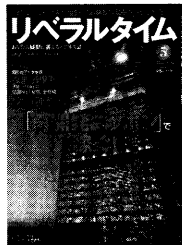
する十九名の日本人歴史学者がこれに反論。三月十七日、外国特派員協会で秦氏が会見を行い、マグロウヒル社の教科書に対して「二十六行という短い文章でこれほど事実の間違ひが多い記述を私は見たことがない」と指摘した。さらに十九名の連名で、

具体的に八カ所の事実誤認を指摘する「訂正勧告」をマグロウヒル社に送付することを明らかにしている。

具体的にどのような主張の応酬がなされているのか。日米双方の文書を掲載し、読者の判断を仰ぎたい。

(編集部)

あなたの疑問に答えるビジネス誌
リベラルタイム
 2015年5月号 4月3日発売
 定価 600円 ※内容はあくまで予定です



特集「再開発ニッポン」で稼ぐ!

TALKING

昭和女子大学学長
 坂東 眞理子
 グローバルに
 活躍する
 「女性」を育成

季刊——そばを究める

蕎麦春秋
 絶賛発売中!! 33
 定価600円 VOL.33

ちょっと気になる
 特集 **立ち食いそば**

個性的な立ち食いそば店
 11店を紹介する!

匠の流儀

吟(東京・小平) 渡邊 草さん
 睦(東京・中野) 原田 睦さん

そば
 五景

路庵(東京・下北沢)、
 東蔵(埼玉・上尾)、
 遊歩(埼玉・深谷)ほか

蕎麦春秋公式サイト「蕎麦春秋.com」
 絶賛公開中!
<http://www.sobashunju.com/>

株式会社リベラルタイム出版社
 〒104-0061 東京都中央区銀座2-11-8
 第22中央ビル8階
 TEL03-3547-3711 FAX03-3547-3710

政府にはこの領域警備法案の趣旨を
 取り入れ、部隊行動基準の弾力的、
 適切な運用のため、常設の「領域警備
 専門委員会」を国家安全保障会議(日
 本版NSC)に設置することを提案
 したい。

現在の尖閣をめぐる状況は、誤解
 をする向きもあろうが、中国が事態
 をエスカレートさせていけないこと
 に日本が救われている側面がある。実
 際にシナリオの事態が起これば、日
 本は「警告」^{にち}「睨み合い」「外交交渉」の
 対応以上はしないのではないか。
 一義的に事態に対処する海保の能

力強化、南西諸島における部隊配備
 で奇襲および本格侵攻まで対処でき
 る能力をもつことは当然であろう。
 一旦、^{とうしよ}鳥嶼が盗られると、その奪
 回には必ず多くの兵力と多くの犠牲
 を伴う。抑止力を伴う領域警備法が
 必要な所以である。領土、領海を防
 衛する意思がないとみなされれば侵
 攻の口実となる。主権保全を躊躇す
 る国に主権国家としての資格がある
 うか。

中国では小さな紛争、武力衝突は
 平和時の外交交渉を有利にするため
 の外交手段の一環である。

米軍が介入せず、必ず勝ると判
 断し、日本の政権に覚悟がないと読
 んだ場合は冒險主義に走る可能性が
 ある。相手の意思をみるのが中国で
 ある。中国の政治経済という国内要
 因だけではなく、日本の法制の欠陥
 に冒險主義を誘発する原因があると
 断言する。

のぐちとうしゅう
 千葉県生まれ。日本の大学を中退後、北京の中国人民大
 学国際政治学部卒。九〇年、産経新聞に入社。二〇〇四
 年、中国総局特派員として北京駐在。外信部デスクを経て
 二〇一二年九月、同社退社。現在、新外フフォーラム
 代表、拓殖大学客員教授、国家基本問題研究所客員研究
 員など。著書に「中国、真の権力エリート」軍、諜報、
 治安機関(新潮社)などがある。

米歴史学者十九人の見解

〈日本の歴史家たちと連帯する〉

編集者へ

日本政府は最近、第二次世界大戦中に日本帝国陸軍の野蛮な性的搾取制度のもとで呻吟した「慰安婦」についての国内外の歴史教科書の記述を削除させようとしているが、われわれは歴史家として落胆の思いをここに表明する。

歴史家たちは、搾取された女性の数が数万なのか数十万なのか、その調達に関して軍はどのような役割を果たしたのか、論争を続けている。

だが、歴史家・吉見義明の日本政府公文書館での綿密な調査と、アジア全域にわたる生存者の証言によって、国営性奴隷制というべきシステ

を記録する作業に従事するジャーナリストや学者を脅迫し、威嚇している。

ムの本質的な特徴が議論の余地なく明らかになっている。女性たちの多くは、みずからの意思に反して徴用され、移動の自由のない前線の駐屯地に連行された。生存者たちは、軍人に強姦され、逃亡しようとして殴打されたことを生々しく語っている。

安倍晋三首相の現政権は、愛国心教育を推進する努力の一環として、慰安婦についての確立した歴史に公然と異議を唱え、教科書の記述を削除させようとしている。

保守系の政治家のなかには、国家の責任を否定するために法律的議論を持ち出す者もいれば、生き残りの慰安婦を侮辱する者もいる。右翼の過激派は、慰安婦制度と犠牲者の話

自らの利益に合わせて歴史を語るうとするのは、日本政府だけではないことをわれわれは認める。アメリカ合衆国では、州や地方の教育委員会が、たとえば、アフリカ系アメリカ人奴隷制を曖昧にするように教科書を書き換えようとしたり、ベトナム戦争についての「非愛国的」記述を削除しようとしたりしている。

二〇一四年、ロシアでは、第二次世界大戦中のソ連の行動について政府が誤情報と認定したものを拡散すると犯罪とされる法律が成立した。

今年アルメニア人大屠殺事件百周年にあたり、トルコ政府に責任があることを主張したトルコ市民は、誰でも牢屋に送られることになった。し

かしながら日本政府は、国内外の歴史家の著作を直接、狙い撃ちしているのである。

二〇一四年十一月七日、日本の外務省はニューヨーク総領事に指示し、マグロウヒル社に対して、ハーバート・ジーン・グラールとジェリー・ベントリーの二人の歴史家が書いた同社の世界史教科書『伝統と遭遇―過去へのグローバルなまなざし』のなかにある慰安婦の記述を訂正するよう求めた。

二〇一五年一月十五日、ウォールストリートジャーナルは、昨年十二月に日本の外交官とマグロウヒル社の代表との間で行われた会合について報道した。二つのパラグラフの削除を求める日本政府の要望に対して、学者たちは慰安婦に関する史実を確立していると述べて、同社はこ

れを拒否した。

二〇一五年一月二十九日、さらにニューヨークタイムズは、日本の首相が国会審議の場で、直接、件の教科書を問題として取り上げ、政府が「なすべき修正に失敗した」ことを知って「衝撃を受けた」と語ったと報道した。

われわれは出版社を応援するとともに、いかなる政府も歴史を検閲する権利を持たないとする著者ハーバート・ジーン・グラールの見解に同意する。われわれは日本だけでなく、この

地域であろうと、第二次世界大戦の慰安婦問題その他の暴虐行為に関する事実を明るみに出そうと働いている多くの歴史家たちと連帯する。

われわれが歴史を研究し、歴史を書くのは過去から学ぶためである。したがって、われわれは出版社や歴

史家に圧力をかけ、その研究成果を政治的目的のために書き変えさせようとする国家や特定の利益集団の動きに反対するものである。

編集者による注記

このアピールは、二〇一五年一月二日、ニューヨーク市におけるアメリカ歴史学会年次大会の折に開かれた非公式の会合に由来するものである。

(藤岡信勝訳)

(アメリカ歴史学会発行『Perspective on History』二〇一五年三月号掲載)

日本人有志による訂正勧告

二〇一五年二月十一日の産経新聞は、米国の公立高校等が使われている世界史の教科書に、旧日本軍による慰安婦強制連行など事実と異なる記述がある問題で、昨年十一月と十二月に日本の外務省が出版元のマグローヒル社と執筆者のジューグラー教授（ハワイ大学）に訂正を申し入れたことを報道した。二月七日の東亜日報、二月十日のワシントン・ポストも同様の記事を掲載した。

それが契機となって、一月二日の全米歴史学会の年次大会に際し、十九人の歴史家有志が、アレクシス・ダデン教授（コネティカット大学）がとりまとめ役で、吉見義明教授に代表される「日本の歴史家たちと連

帯」して、出版社と執筆者を日本政府の「検閲」から守ろうと呼びかける声明を作成、学会の月報三月号（三月二日発行）に掲載された（前掲）。

われわれは外務省が申し入れた内容には知らされていないが、マグローヒル社の教科書『伝統と遭遇』の第五版八百五十三ページで「慰安婦」と題した記述を検分すると、多くの不適切な箇所を発見した。とりあえず、下記のような八箇所の事実誤認部分（①～⑧）に限定して理由を付し、マグローヒル社が自発的に是正されるよう勧告するものである。

以下（編集部注・244ページ）に、マグローヒル社の教科書の書誌情報と、コラム「慰安婦」の全文を掲

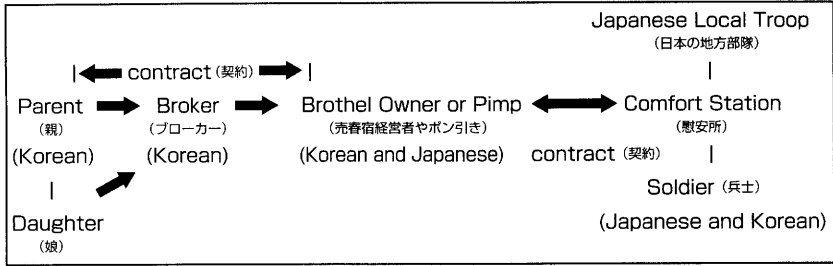
載する。続いて、文中に①から⑧まで下線を引いた箇所について、コメントで問題点を指摘した。

① forcibly recruited, conscripted

十九人の米歴史家の声明で、連帯する日本の歴史家たちのなかでただ一人、実名で言及されている吉見義明は著書のなかで、慰安婦のうちの「最多は（コリアン・ブローカーに）騙され」（deceived）」慰安婦になった」と記している（Yoshimi Yoshiaki, *Comfort Women*, Columbia University Press, 2000, p.103）。

吉見は日本のテレビの討論番組でも、「朝鮮半島における強制連行の証拠はない」と述べている。

朝鮮半島における慰安婦の調達では、当事者の多くは朝鮮人が占めており、関係者の相互関係の全体像は



次の模式図で表される(上図)。

② as many as two hundred thousand women の数字は過大すぎる。秦郁彦は⑤で示すように約二万と推計、吉見義明は「最低でも五万人前後」「歴史学研究」八百四十五

号、二〇〇八年、P24と記述している。また⑥の解説をも参照せよ。

③ age fourteen to twenty

一九四五年、フィリピンで米軍の捕虜になった慰安婦二十人(日本人十一、朝鮮人六、台湾人三)の調査カードによると、うち十九人が二十歳以上である(US National Archives, RG 389.PMG)。twenty は twenties と修正すべきである。

④ as a gift from the emperor

教科書としては、国家元首 (national head) に対する、あまりに非礼な (too impolite) 表現である。

⑤ majority of the women came from Korea and China

秦の推計では、全慰安婦数は約二

万人で、そのうち最も多数を占めるのは日本人の約八千人、朝鮮人はその半数の約四千人、Chinese and others は約八千人であった。

⑥ between twenty and thirty men each day

②と⑥はきわめて誇大な数字であり、自己矛盾 (self-contradiction) の関係にある。「二十万人の慰安婦」が「毎日二十人〜三十人の男性を相手にした」(⑥)とすれば、日本軍は毎日、四百万回〜六百万回の性的奉仕を調達したことになる。

他方、一九四三年の日本陸軍の在外 (overseas) 兵力 (strength) は約百万であった。教科書に従えば、彼らは全員が「毎日、四回〜六回」慰安所に通ったことになる。戦闘する暇も、まともに生活する暇さえもなく



3月17日、秦郁彦氏、大沼保昭氏が外国特派員協会にて会見、秦氏は米教科書への訂正を求める声明を発表 (写真提供/産経新聞社)

なる。

⑦ the same risks as soldiers

慰安婦と看護婦は戦闘地域ではない後方の安全な場所で勤務してい

た。前線 front line で、兵を慰安婦の護衛に割く余裕はなかった。

⑧ massacréd large numbers of comfort women

根拠史料は何なのか。もしそういうことがあれば、東京裁判や各地のBC級軍事裁判で裁かれているはずであるが、そういう記録はない。何人、いつ、どこで殺害したか、証拠がなければ教科書に書くことは適切でない。

秦は、慰安婦の死亡率を日赤看護婦(二万六千二百九十五人)の死亡率四・二%とほぼ同じと推定した(秦『慰安婦と戦場の性』p406)。

〈19人の日本人歴史家有志〉

秦 郁彦・日本大学
明石陽至・南山大学

麻田貞雄・同志社大学

鄭 大均・首都大学東京

藤岡信勝・拓殖大学

古田博司・筑波大学

芳賀 徹・東京大学

長谷川三千子・埼玉大学

平川祐弘・東京大学

百地 章・日本大学

中西輝政・京都大学

西岡 力・東京基督教大学

呉 善花・拓殖大学

大原康男・国学院大学

酒井信彦・東京大学

島田洋一・福井県立大学

高橋久志・上智大学

高橋史朗・明星大学

山下英次・大阪市立大学

マグローヒル社発行の高校生用歴史教科書
『伝統と遭遇』
慰安婦に関する記述 (英文)

*○の数字とアンダーラインは引用者がつけたものである。

Comfort Women Women's experiences in war were not always ennobling or empowering. The Japanese army ①forcibly recruited, conscripted, and dragooned ②as many as two hundred thousand women ③age fourteen to twenty to serve in military brothels, called "comfort houses" or "consolation centers". The army presented the women to the troops ④as a gift from the emperor, and the women came from Japanese colonies such as Korea, Taiwan, and Manchuria and from occupied territories in the Philippines and elsewhere in southeast Asia. The ⑤majority of the women came from Korea and China.

Once forced into this imperial prostitution service, the "comfort women" catered to ⑥between twenty and thirty men each day. Stationed in war zones, the women often confronted ⑦the same risks as soldiers, and many became casualties of war. Others were killed by Japanese soldiers, especially if they tried to escape or contracted venereal diseases. At the end of the war, soldiers ⑧massacred large numbers of comfort women to cover up the operation. The impetus behind the establishment of comfort houses for Japanese soldiers came from the horrors of Nanjing, where the mass rape of Chinese women had taken place. In trying to avoid such atrocities, the Japanese army created another horror of war. Comfort women who survived the war experienced deep shame and hid their past or faced shunning by their families. They found little comfort or peace after the war.

(J.H.Bentley and Herbert F.Ziegler, Traditions & Encounters: A Global Perspective on the Past, McGraw-Hill, 2011, p.853.)

マグロウヒル社 『伝統と遭遇』より 慰安婦に関する記述 (和訳)

慰安婦 戦時における女性の経験は、常に、気高いもの、力を与えるものばかりであったわけではない。

日本軍は、「慰安所」ないし「慰安施設」と呼ばれる軍用売春宿で働かせるために、最大で二十万人にも及ぶ十四歳から二十歳までの女性を、強制的に募集し、徴集し、制圧した。

日本軍は、部隊に対し、天皇からの贈物であるとして、これら女性を提供した。これら女性は、朝鮮、台湾及び満州といった日本の植民地、また、フィリピン及びその他の東南アジア諸国の占領地の出身である。女性の大半は朝鮮及び中国の出身である。

いったんこの帝国の売春サービス

に強制的に組み込まれると、「慰安婦」たちは、一日あたり、二十人から三十人の男性の相手をさせられた。

戦闘地域に配置され、これら女性はいざいざ、兵隊らと同じリスクに直面し、多くが戦争犠牲者となった。

他の者も、逃亡を企てたり、性病にかかったりした場合には、日本兵士によって殺害された。戦争の終結に際し、この活動をもみ消すために、多数の慰安婦が殺害された。

日本兵のための慰安所の設置の背景には、中国人女性に対する大量強姦の発生した南京の恐怖があった。そのような残虐行為の発生を回避するために、日本軍は別の戦争の恐怖を生み出した。

戦争を生き延びた慰安婦たちは、深い恥辱を経験し、過去を隠したり、または、家族から絶縁を受けたりした。彼女らは、戦後も、慰安や平静を得ることはほとんどなかった。

(外務省仮訳)